富永神社祭礼奉納

能　組

とき　平成十四年十月十一日(金)
午後四時四十五分始
ところ　富永神社能楽殿

5:00分頃

仕舞
葛城　平野瑞季
田村　島考三郎
羽衣　平阿裕美
蟬丸　島野尚大郎

狂言
口真似
太郎冠者　佐野仁美
主人　権田捺実
客　小林加奈
後見　畑中良雄

仕舞
葛城　今泉尚美
田村　松尾明海
田村　中嶋瞳
国栖　今泉友美

5:40分頃

狂言
墨塗
大名　酒井宏
女　天野雅夫
太郎冠者　小澤貞博
後見　畑中良雄

仕舞
猩々　鈴木崇史

仕舞
殺生石　谷野允千帆

（休憩　三十分）

7:00分頃

能
半蔀
シテ　今泉英三
ワキ　牧野修
間　畑中良雄
後見　鈴木肇
大鼓　清水利高
小鼓　森田收
笛　酒井淑規
地謡　太田研司　太田康弘　鈴木崇史　高林呻二　竹内省吾　高林白牛口二　加藤貢　竹内三郎

8:00分頃

狂言

附子

太郎冠者 山本勝
次郎冠者 山口俊一

主人 佐野泰三
後見 酒井宏

8:30分頃

舞囃子

鞍馬天狗

中嶋康夫

大鼓 清水利高
小鼓 今岡アイ子
太鼓 後藤佳代子
笛 加藤貢

8:40分頃

狂言

腰祈

祖父 大原正巳

山伏 水谷至男
太郎冠者 権田重紘
後見 酒井宏

9:00分頃

半能

養老（シテ）

清水利高

ワキ 竹内三郎

大鼓 河村総一郎
小鼓 福井啓次郎
太鼓 中嶋康夫
笛 今泉英三

後見 太田康弘

地謡 太田研司 森田牧
鈴木崇史 高林呻二
牧野修 高林白牛口二
加藤貢 竹内省吾

（終了予定九時三十分頃）

主催 本町区

あらすじ

狂言

口真似

知人から酒肴を貰った主人、程よい相手を連れて来る様にと太郎冠者に言い付けます。ところが連れて来たのは評判の酒乱の男で、一盃飲んでは一寸抜き、二盃飲んでは二寸抜き、後にはするりと抜いて酔狂する者です。一計を案じた主人は、太郎冠者に自分の言う様する様にせよと ……

狂言

墨塗

帰郷することになった大名、都で馴染んだ女に別れを告げにいくと悲しんで泣きます。実は、女が水入れの水で目をぬらし、泣いたふりをしているのを見つけた太郎冠者は、水を墨に取り替えます。女の顔が真っ黒になったので、大名も女の本心を知り恥じをかかせようと、形見だと鏡を与えます。墨のついた自分の顔をみて ……

能

半蔀

都、紫野雲林院の僧が、九十日にわたる夏の修行も終わり近くなったので、その期間に仏に供えた花々の供養を行います。すると白い花が開いたかのように、どこからともなく一人の女が現れて、花を捧げます。僧が、女に名をたずねると、ただ夕顔の花と答えるだけで、その名を明かしません、更に問いつめると、五条あたりの者とだけいって、活けられた花の陰に消え失せます。〈中入〉僧が不思議な思いをしていると、丁度、所の者がやって来て、光源氏と夕顔の物語を聞かせ、その女性は夕顔の亡霊であろうと述べ、五条あたりへ弔いに行くことを勧めます。僧が五条あたりをたずねてみると、荒れ果てた一軒の家に、夕顔の花が咲いています。僧が、夕陽が落ち、月がさし込むこの家の風情を眺め、『源氏物語』の昔を偲んでいると、半蔀を押し上げて、一人の女性が現れます。女は、源氏と夕顔の花の縁で歌をとりかわし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を物語り、舞をまいます。しかし、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、また半蔀の中へ消えて行った、と思ったが、それは僧の夢の中のことでした。

狂言

附子

主人が外出するにあたって太郎冠者と次郎冠者に、これは「附子」という猛毒で吹く風に当たっても気を失って倒れてしまうから気をつけるようにといって出かけます。初めはおびえながら「附子」の番をしていた二人は、怖い物見たさのあまり、扇で仰ぎながら恐る恐る桶の蓋を開けて見ると、何とその正体は ……

狂言

腰祈（こしいのり）

山伏の修行を終えた郷（さと）の殿が、本国に帰る途中に都へ立ち寄り、祖父を見舞おうと思いつきます。家をたずね座敷で待っていると、出てきた祖父がすっかり年老いて、腰も曲がっています。気の毒に思った郷の殿は、祈りで直そうとするが、行力が強すぎるのか、腰が伸びすぎたり曲がりすぎたりします。とうとう祖父は……

半能

養老（ようろう）

頃は初夏、美濃国（岐阜県）本巣の郡に霊水が湧き出るという報告があったので、雄略天皇の勅命を受けて、勅使が下向します。一行が養老の滝のほとりに着くと、老人と若者の二人の樵夫（きこり）が、来かかります。勅使は、これこそ話に聞く養老の親子であろうと思って尋ねると、果たしてそうでした。老人は、問われるままに、養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。ついで老人は、勅使をその滝壺に案内し、霊泉をほめ、更に他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使は、感涙を流し、この由を奏聞（そうもん）しようと帰洛しかけると、にわかに天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。〈中入〉そこへ、所の者が出て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで、若返りの様を見せます。ついで、養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、共に衆生を救おうとの御誓願であって、時として神と現じ仏と現れ給うのであると述べます。そして峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を奏し、泰平の世を祝福して、神の国へと帰ってゆきます。

半能

一番の能の前半をほとんど省略し、後半のみを演ずる演能方法である。